



私たちの思いを聞いて！・・・『豊見城市少年の主張大会』

7月8日(水)に豊見城市中央公民館において、令和8年度 第43回『豊見城市少年の主張大会』が開催されました。市内4中学校から各学校代表2名が自作の主張文を発表しました。本校からは3年生の伊敷莉那さん、我喜屋佑月さんの2名が発表しました。自分の今の思い・考えを自分の言葉で素直に表現した中学生らしい素敵な発表でした。



「言葉がくれた未来への道」

3年 伊敷 莉那さん

みなさんの心の一番深いところにずっと残っている「言葉」はありますか。

私にとってそれは、あるどん底の時期に出会った、たった一言のフレーズでした。小学五年生のころ、私は学校に行くのがとても憂鬱でした。友達との関係がうまくいかず、クラスの中で自分の居場所を見つけられず、だんだん孤独になっていきました。追い打ちをかけるように、当時の担任の先生とも折り合いが悪くなってしまい、「どうして自分ばかりこんな目に遭うのだろう」「私の何が悪かったんだろう」そんな答えのない問いが頭を巡り、私は次第に学校を休みがちになっていきました。部屋にこもり、一人で泣き続ける毎日。世界から取り残されたような疎外感の中で、私の心は完全に閉ざされていました。

そんなある日のことです。何気なくテレビから流れてきた音楽が、私の耳に飛び込んできました。アップテンポなリズムに導かれるようにして聞こえてきたのは、「いつだって大丈夫」という言葉でした。その瞬間、胸の奥がぎゅっと熱くなり、涙を流していました。それまで誰にも言ってもらえなかった、そして何より、自分自身が一番欲しかった言葉を、その曲が私に届けてくれました。「大丈夫、そのままでいいんだよ」と、優しく背中を押して、私を肯定してくれたような気がしました。

わずか数分間の音楽。しかし、その短い時間が、私の止まっていた時間を再び動かしてくれました。この経験を通して、私は音楽の持つ圧倒的な魅力と、言葉が持つ計り知れない力に気づかされたのです。たった一曲の音楽、たった一言の言葉が、絶望の淵にいる人間の心を一瞬で救い、生きる勇気を与えることができる。なんて素晴らしいことだろうと、心から感動しました。

この出会いをきっかけに、私には大きな夢ができました。それは『音楽プロデューサー』になることです。かつての私のように、悩み、苦しんでいる誰かの心に届き、その人の明日を照らすような音楽をこの手で生み出したい。そう強く願うようになりました。夢ができてからの私は、変わりました。それまでは後ろ向きで、何事からも逃げてばかりいた自分が、今では夢に向かって前向きに努力できるようになりました。学校の勉強も、日々の生活も、すべてが未来の自分に繋がっていると信じられるようになったのです。

しかし、今の社会に目を向けてみると、どうでしょうか。ニュースを見れば、言葉のすれ違いが原因で起きる悲しい事件やトラブルが後をたちません。スマートフォンをはじめとする便利なデバイスが普及し、私たちはいつでも、どこにいても、誰とでも繋がれるようになりました。しかし、画面越しのやり取りだけで、本当に私たちの心は繋がっていると言えるでしょうか。短い文字だけのやり取りは、時に相手の表情や感情を見えなくさせ、誤解を生み、かえって私たちの関係を疎遠にさせてしまっているように思えてなりません。便利になったはずの世の中で、心の距離が離れていくのは、とても悲しいことです。

だからこそ、私はみなさんに訴えたいのです。私たちは「言葉」を自在に扱える人間として、今一度、その重要性を見つめ直すべきではないでしょうか。言葉は、時に人を深く傷つける刃になります。しかし同時に、人を閉じこもった殻の中から救い出す、温かい光にもなり得るのです。私がある曲の歌詞に救われたように、私たち一人ひとりが発する言葉は、誰かの人生や運命を変えるだけの大きな力を秘めているのです。

互いに励まし合い、認め合い、そして共に高め合えるような、本当の意味で温かい人間関係を作っていくこと。そのために、まずは身近な人への言葉使いから、大切にしてみませんか。相手を思いやり、心を込めて紡ぐ言葉こそが、冷え切った社会を温めるメロディになると私は信じています。

私が音楽で世界を元気にしてみせるように、みなさんも自分の言葉で、誰かの明日を「大丈夫」にしてみませんか。一人ひとりの優しい言葉が多く響き合う、そんな未来を、私と一緒に作っていきましょう。



「『僕』を変えたこと」

3年 我喜屋 佑月さん

「お前、本当にこのままでいいのか？」

みなさんは、誰かの一言に、魂を揺さぶられるような衝撃を受けたことがありますか。新しい一步を踏み出す勇気をくれるような、そんな言葉に。

今から一年前、僕はある大失敗を犯しました。学校の休み時間、いつものように周りの空気に流され、友達と歯止めのきかない悪ふざけをしていた時のことです。

勢い余った僕の身体は、教室のドアへと激しくぶつかりました。鈍い音とともに、ドアにぽっかりとあいてしまった大きな穴。その瞬間、楽しかった教室の空気は凍りつき、僕は自分のしてしまったことの重大さに血の気が引いていきました。

当然こっぴどく叱られました。しかし、その時の僕はどこか他人事のように「めんどくさいな」「早く話が終わらないかな」と、右から左へと話を流していたのです。そんな僕の甘えた態度を見透かしたように、父が、まっすぐ僕の目を見つめて言ったのが、あの一言でした。

「お前、本当にこのままでいいのか？このまま周りに流されて、ふざけて、問題ばかり起こして、本当に自分の行きたい未来へ進めると思っているのか」

その言葉は、僕の心の奥底に鋭く突き刺さりました。ただ怒られているのではない。自分のこれからの生き方を問われているのだと、初めて気づかされたのです。「このままで、本当にいいのだろうか」夜、自分の部屋で一人になった時、父の言葉で頭の中はいっぱいでした。周りに流され、楽な方へと逃げ続け、自分の行動に責任を持たないままで、本当にいいわけがない。何より、そんな自分を、僕はこれからも好きでいられるのだろうか。焦りと、そして「変わりたい」という強い願いの中で、僕は一つの決意をしました。それは、ただ流されて生きるのをやめ、日常のすべてを「意識」して生きるということです。

「意識」を変える。言うのは簡単ですが、これまで染み付いた怠惰（たいだ）な習慣を変えるのは容易ではありません。それでも僕は、学校や部活の中で、自分の行動をつとめて「意識」し始めました。すると、僕の日常に大きな変化が生まれ始めたのです。

変化の第一歩は、部活動での「挨拶」と「声出し」でした。それまで僕は、「挨拶をしろ！」「声を出せ！」と何度言われても、形だけで適当にこなしていました。しかし、その日は違いました。「チームのために声を出そう」と強く意識して、練習に臨んだのです。すると、不思議なことが起こりました。僕が大きな声を出すと、隣の仲間も応えてくれる。チーム全体の空気がガラリと変わり、活気と熱量が生まれていくのが分かりました。ただの練習が、一気に価値のある時間へと変わったのです。バラバラだったチームが、一つの目標に向かって固く結びつく。団結力が高まる瞬間を、僕は初めて自らの手で作り出すことができたのです。

第二の変化は、生活の中で「周りの人の話を聞く」ということでした。それまでの僕は、先生の言葉をただ聞き流していました。しかし、「自分のためにしっかり聞こう」と意識していると、教科書を眺めているだけでは分からない「本当に大切なポイント」がわかるようになってきたのです。しっかり話を聞くようになると、驚くほど授業の内容が頭に残り、テストの点数も上がっていきました。

この二つの経験を通して、僕は大きな真理に気づきました。それは、「環境や才能が自分を変えるのではない。自分の『意識』が、自分の世界を変えるのだ」ということです。今まで「めんどくさい」と切り捨てていた大人たちの言葉は、僕を縛る鎖ではなく、僕を成長させるための道標だったのだと、今なら素直に理解できます。

しかし、人間の心は弱いもので、今でも、気が緩むと授業中に気が散ったり、せっかく高くもった「意識」が小さくなってしまふ瞬間があります。「これくらい、いいか」という過去の自分が、耳元で囁くのです。だからこそ、僕はここで宣言します。僕はこれからも、人の話にしっかり耳を傾けます。周りの空気に流されず、自分の意思で物事を判断します。そして、自分の行動に責任を持ちます。

あの日、僕の目を覚ましてくれた父の言葉。あの言葉があったから、僕は「意識」という人生の武器を手に入れることができました。受験という大きな壁を前に、自分の意思で一步を踏み出したこの足跡は、これからの人生を支える確かな自信になると信じています。

みなさん、なんとなく流されるだけの毎日に、ピリオドを打ってみませんか。自分の「意識」のスイッチを入れたその瞬間から、昨日とは違う新しい自分が、きっと見つかるはずです。



司会を務めた
3年生 中田陽菜さん 西銘航平さん



応援に駆けつけた3年生 2年生のみなさん